

実り多き東北の旅 ――ウイズコロナの修学旅行

図書館係 阿部健治

2年生と一緒に修学旅行に行ってきた。ウイズコロナの修学旅行で、ちょっと心配だったが、発熱する人も出なくて、本当にいい旅だった（みんな、すごく気をつけて過ごしたんだと思う。s わすかは足女生だ！）。

初日の災害学習はすごく勉強になった。仙台市の砂浜（海水浴場として知られた所だそう）にある荒浜小学校は4階建てだが2階まで津波が来たという。7メートルの津波だったが、多くの人が屋上に避難して助かったとのこと。よかった。津波の時にはとにかく高い建物へ。単純にそう思った。

しかし、次の南三陸町に行くと事情はずっと複雑だった。ここは湾になっているので、そうした地形では津波は増幅されて16メートル（！）にもなったというのだ。しかもその波が正面にぶつかって20メートルにもなり、跳ね返って上から降ってきたとか。それで15メートルの高台に立っていた中学校も被災したという。地元の人もしこに避難すれば絶対に大丈夫だと思ったらしい。そう考えるのも無理はない。実際に行ってみて筆者もそう思った。避難訓練の時に校長先生もおっしゃったが、こういう時に「かもしれない精神」を行動に移せるかどうかのカギだ。しかしこれは決して易しいことではない。

その日はこの町の「ホテル**観洋**」という宿に泊まったが、名前の通り、翌朝の日の出の海は最高に美しかった。これが毎日見られるとはなんと幸せなことだろう。しかし、これは「災害と隣り合わせの贅沢」なのだと強く思った。

2日目に行った松島（日本三景の一つ）もやはり湾だが、ここは湾の入り口にかなり大きな島があり、それで津波が減殺（「げん**さい**」と読む。少し国語の勉強を入れてみました。）されて、伊達政宗が整備した名刹「瑞巖寺」も足元が浸ったくらいだったらしい（そう聞かされてもピンと来ない。遊覧船に乗って湾内を見渡したが、島がいくら沢山あると言ってもまばらだし……。南三陸は湾が小さいからか。わかる人教えてください。）。しかし、そうは言っても**歴史的な被害**は大きかった。瑞巖寺は両側に樹齢400年（政宗が植えたということ！）の杉の巨木が並ぶ参道が有名だったのだが、これが津波による塩害でほとんど枯れ、植えたばかりの細い木に代わっていたのだ。巨木の切り株が残っているのが本当に痛々しかった。

2日目の午前中に行ったのが世界遺産の中尊寺金色堂だ。外側も内側もすべてに金箔が貼られていて、それを保護するために室町時代中期に鞘堂（覆堂）が作られたのだが、それまでもが重要文化財という極め付けの逸品。平安時代後期に、都から遠く離れた陸奥で、これほどのものができていたというのは驚異としか言い様がない。足女の2年生諸君は本当にラッキー（沖縄へは行けなかったけどね。「人間（「じんかん」と芦田は読んでいた）万事塞翁が馬」だ。ちなみにこれ、芦田愛菜の座右の銘だとか。）である。

筆者も中尊寺は30年ぶりくらいだったのだが、宝物館である「讚衡蔵」に入って、まず三体の丈六仏（仏像の基本サイズとして立像で一丈六尺＝4.8 mくらいというのがあるらしい。中尊寺のは座像なのでその半分の八尺＝2.4 mだそうである。）と対面して、そのすばらしさに打たれた。中央に阿弥陀如来、両側に薬師如来という並び方だが、両側の薬師如来が片方は金肌・黒螺髪（らほつ）で、もう一方が黒肌・金螺髪なのである。色の配合の妙にも感心したが、それ以前に仏の表情やたたずまいが本当によかった。筆者が見ている傍で、2年1組の生徒

たちの中から、家の人に、ここの仏様のお顔がとていいからよく見てきなさいと言われたんだ、という声が聞こえてきた。なんていいご家庭なんだろうと羨ましく思った。

千手観音や騎師文殊菩薩など、その他の仏様もよかった。書いているときりがなく、この辺にしておくが、どれも私たちが見慣れているものと違って少しエキゾチックな感じがあるようだ。この次は時間が十分ある時に来たいものだ。

中尊寺の参道（我々は帰り道としてそれを下っていったのだが）は月見坂と呼ばれ、両側に杉の巨木が立ち並んでいるの（誰かが日光の杉並木みたいだと言った）。これも伊達政宗が植えさせたものらしい。我々の旅は仙台城で政宗の騎馬像を見ることから始まった（この像は仙台という町の守護神のように見えた。仙台は政宗が作った町なのだ。）が、このような古寺への配慮も忘れない政宗の見識には本当に感心させられる。

中尊寺の後に見た毛越寺の浄土庭園。30年前の記憶はほとんどなかったが、今回はとてもよかった（筆者もあの世が少し近づいてますから）。大きな池を囲んで10以上のお堂のあとがあるのだが、それらが皆立っている風景を想像したら、さぞかし壮観だったろうと思えた。ここは平安貴族の寝殿造りを模しているという説明を読んで、ああそうか、寝殿造りは浄土庭園だったんだと妙に感心したりした。

こう書いてくると、今回の修学旅行は若い足女生諸君より、年取った筆者ら向けの内容と言えるものもあったかと思うが、皆もいずれ年をとるので、皆の心には将来への種を蒔かれたという経験になったのではないかと思う。とにかく、多くの人々の協力によって、無事に行ってこられたというのが何より有難いことであつた（良かったですね。久保田先生。）。

修学旅行のことを長々と書いてしまったが、これは「図書館だより」なので、とにかく本の紹介をしよう。筆者が今回皆に勧めたいのは、平泉の玄関口にあたる一関市（人口12万人。岩手県南部の中核都市）にゆかりの深い**内海隆一郎**である。内海は高校までをここで過ごし、小説家になってからもここに住んだことがあったらしい。地域に根ざした作家で、作中にもよく一関市（I市とか岩井町などと書かれているが）が登場する。あまり知られていないが、何度も直木賞の候補になった実力のある作家である。

内海の特徴は400字詰原稿用紙で11～12枚（文庫本で8～9ページ）程度の短編を300程も残しているということである。これらは「人々シリーズ」（短編集の題名も「**人びとの情景**」「**人びとの季節**」などである）と呼ばれ、市井の人々を扱い、最後には「人の善意」が明らかになるという共通の構造（「ハートウォーミング」とも言われる）を持っている。こう言うとな俗的な「お涙頂戴物」のように思われるかもしれないがそうではない。彼の小説には必ず「意外性」があるからだ。冒頭、一見奇矯に見えるある人物の行動が描かれ、それは周囲の人々に非難されたりもするが、その人の背景などが明らかになると、実はそれは**その人の善意の表れだったということがわかる**、というのが基本パターンで、その「意外性」の演出が実に自然で見事なのだ。

筆者が内海の作品を知ったのは「**彼の故郷**」という作品が、センター試験対策用問題集の題材になっていたからだ。これの解説をするために読んでいたのだが、教卓で涙が出そうになり、困った記憶がある。この他に図書委員も薦めている「**芋ようかん**」や「**木綿豆腐**」、「**相棒**」などが高校教科書に採用されているようだ。どれも読みやすく、読書が苦手の人にも是非勧めたい作品群である。

内海の作品は数多く出版されていたが、近年ほとんどが絶版となり、今回も図書館で買うことができなかった。わずかに、内海の代表作を谷口ジローがコミック化したものだけが買えた。取りあえずはこれを読んでほしい。